

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS, Part II

Japanese Studies

Friday 30 May 2014 09.00 – 12.00

J.11 MODERN JAPANESE 3

Answer **ALL** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.

STATIONERY REQUIREMENTS

20 Page Answer Book x 1
Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS

none

**You may not start to read the questions
printed on the subsequent pages of this
question paper until instructed that you may
do so by the Invigilator.**

(1) Translate the following passage into **Japanese** (*kanji* and *kana*):
[35 marks]

Diplomacy is the method by which sovereign states reach agreement with each other. The methods change; but so long as there are sovereign states and so long as they wish to agree, there will always be diplomacy – and even diplomats. What makes international affairs so bewildering at present is that the methods are changing and that the basic assumptions are being challenged at the same time. The change in methods can be exaggerated. It is true that things move faster nowadays. Diplomats telephone and send telegrams where they used to write dispatches; they listen for the ring of the telephone-bell where they used to wait for the arrival of the messenger. But what they say on the telephone is very much what they used to write in their dispatches; maybe the style is a little less elegant. In any case, the essential job of the diplomat is personal contact with the rulers of other countries; and this job has changed very little. It is still important to have an able British ambassador in Washington and an able American ambassador in London. A good diplomat cannot make two countries agree if they do not want to agree, but he can make their agreement easier if they want to agree.

A great change is often found in the way in which the man at the top – President, Prime Minister, or dictator – cuts across the work of the diplomats and does the job himself. But this is not new at all.

telegram	電報
dispatches	報告書

A J P TAYLOR, *Europe: Grandeur and Decline* (1981), p.364.

(2) Summarise this passage in **Japanese** (*kanji* and *kana*): [35 marks]

英、福祉受給を制限 出稼ぎ急増に危機感 EU、ルーマニア人などの就労規制撤廃

欧州連合（EU）で、「最貧国」とされるルーマニアとブルガリアの出稼ぎ労働者に対する就労規制が1日、撤廃された。移民の流入が急増するのを警戒する英国は、対抗手段として福祉の受給制限に乗り出した。東欧など10カ国を迎えたEU拡大から今年で10年。「移動の自由」という欧州統合の基本理念が揺らいでいる。

先月20日、EU首脳会議後の記者会見で、キャメロン英首相は声を張り上げた。「移動の自由は、自活できない者が福祉をもらうため

にあるのではない」

英国はこの数日前、今年1月以降に入国するEU加盟国の出稼ぎ労働者に失業手当の申請を3カ月間禁止し、物乞いは強制送還した上で再入国を1年間禁じることを決定。ルーマニア人とブルガリア人の大量流入を防ぐのが狙いだった。

EUにとって、人、物、サービス、資本の自由な移動は設立当初からの理念だ。いまは基本条約に明記されている。ただ、新規加盟国からの移民には、条件付きで制限が認められた。

ルーマニア、ブルガリアのEU加盟は2007年。経過措置として最長7年間、他加盟国は両国からの出稼ぎ労働者に対し、労働許可証取得などを義務づけることができた。13年12月末まで英国など9カ国が規制を実施。これが期限を迎えた1日、全て解かれた。

だが英国は、両国からの移民が急増し、職にあぶれた労働者が福祉手当にすぎると懸念。手当の申請に新たな規制をかけた。背景には、東欧移民受け入れを巡る苦い過去がある。

EU加盟国が一気に10カ国増えた04年、当時のブレア英政権は東欧8カ国の労働者を原則、無制限で受け入れた。その結果、01年に5万8千人だったポーランド移民の人口は10年で10倍以上に。農場や食品工場が多い英東部ボストンには東欧移民が定住し、外国人が人口の15%に膨らんだ。

多くが英国の若者が嫌がる農作物収穫などの単純労働を時給6ポンド（約1千円）余の最低賃金で担う。職を奪われた形の地元労働者からは恨み節が漏れる。

ディーン・エベリットさん（44）は野菜農場の派遣労働で妻と子ども4人を養ってきたが最近、解雇された。「経営者は最低賃金で長く働く移民を好む。俺らの仕事は減り、稼ぎは15年前の半分だ」と憤る。

■送り出し国は反論

ルーマニア、ブルガリアから他加盟国への移民はすでに300万人以上に上る。EUの行政機関・欧州委員会は、就労規制の解除後も両国からの出稼ぎ労働者は大幅に増えないとみる。アンドル委員（雇用担当）は1日の声明で「移動の自由の制限は高失業率への解決にはならない」と苦言を呈した。

標的の両国では「いつまで『2級EU市民』扱いなのか」と失望感が広がる。

ブルガリアのビゲニン外相は国営テレビで「ブルガリア人の大多数は高い技能労働か、現地の人の魅力を感じない仕事に取り組んで英国社会に貢献している」と語った。ルーマニアのコルラツェアン外相は「英国で12年に給付金が申請された子ども4万人のうち、ルーマニア人は324人だけ」と数字を挙げ、「福祉タダ乗り」論に反論した。

(TURN OVER)

両国の11年の1世帯あたりの平均手取り収入は英独の11～17%。より多くの賃金を求め、労働者は西へ向かう。移民からの自国への送金は国民生活を支える経済の屋台骨だ。ブルガリアのチホミール・ベズロフ民主主義研究センター上級研究員は「英政府の動きにはEUと距離をとるキャメロン政権の政治的な意図がある」と話す。

■右翼政党躍進を警戒

実際、英国の対応は内政を意識した面が強い。

反移民感情は右翼政党への追い風となり、昨春の地方議会選ではEUからの脱退と移民規制を掲げる英国独立党が躍進。惨敗した与党・保守党にも賛同の声は広がる。

英オックスフォード大学のマーティン・ルーズ准教授は「移動の自由と福祉への平等なアクセスの両立は、加盟国の経済水準が同じ時はうまくいった。だが、貧しい国が加盟し、英国などは両立は長続きしないと疑問を呈する。移動の自由の理念は厳しい圧力にさらされている」と話す。

Asahi Shimbun (3 January 2014), p. 3.

(3) Write an essay in **Japanese** on the following topic (*kanji* and *kana*):
[30 marks]

My observations on young people in Japan

END OF PAPER